六祖壇経異本の源流

中川　孝

六祖壇経は、現存中最古のものとせられる敦煌本も、第一次の添削を受けていることは、六祖の弟子の慧忠国師の語で知られる。更に敦煌本に次ぐ古本壇経が、乾徳五年（九六七）に、邕州羅秀山恵進禅院の沙門恵昕により、上下二巻十一門に分章せられたが、それ迄の約二百年間に、その内容が非常に整備せられていることは、敦煌本と興聖寺本・大乗寺本等を比較して気付くことである。その後、元の至元二十七年（一二九〇）刊行の徳異本、同二十八年刊行の宗宝本に在つては、更に著しい増加改編が為されている。特に宗宝本は壇経の発展した最後の段階のものである為、最も完備したものと見られて、刊本の種類も多く、壇経の注釈書は殆ど全部宗宝本に就いて為されたものであると見ることができる。

宗宝本は至元二十八年に、風旛報恩光孝禅寺住持の嗣祖である比丘宗宝が、至元辛卯の夏に編纂したものであるが、その跋文に、「続て三本を見るに同じからず、互に得失有り、其の板も亦已に漫滅す、因て其の本を取りて校讎す。訛る者は之を正し、略せる者は之を詳にし、復た弟子請益の機縁を増入す云云」と述べている。宗宝の言う三本とは、宗宝本の最初に常に徳異の序を掲げていることによつて、その一は徳異本を指すものと思われる。他の二本は恐らく三巻本の契嵩本と二巻本の恵昕本とであろうと思われる。ここに宗宝が、「弟子請益の機縁を増入す」と云うのは、恐らく恵昕本に対して増入したことを言うものと思われるが、この増入は、徳異本に既に行われている事実であつて、徳異本は、恐らく契嵩本に倣つてこれを増入したもので、宗宝本も契嵩本に倣つてこれを増入しつつ、三本の中最も古い恵昕本に対して、宗宝本も亦機縁を増入したと言うものと思われる。宗宝本は後に明蔵の中に入蔵せられ、永楽八年（一四一〇）の跋文を有する北蔵目録によると、『六祖大師法宝壇経』一巻曹渓原本は北蔵では扶函に、南蔵では密函に収められている旨誌されている。従つて従来南蔵本の壇経も北蔵本の壇経と恐らく同一本であろうと言われていた。然し両者には、内容形式に相違

点が甚だ多い。その第一は、南蔵本には徳異の序が無い。又各章の分章題名が無く、全文一聯の経典となつている。又内容は徳異本に一致し、徳異本の伝香懺悔第五で終つている。

宗宝本の源流を稽うるに、嘗て胡適氏がその「壇経考之一」の中で、宗宝本は、契嵩三巻本を増改したものであると言われ、甚だ卓見であると考えられる。然しその中で胡適氏は、契嵩三巻本は、敦煌写本と『曹渓大師別伝』とを合糅したものと見ておられるが、厳密に言うならば、敦煌写本も『曹渓大師伝』も共に一巻本であつて、ここから一挙に契嵩の三巻本が発生すると考えるのは早急であつて、この間には必ずや恵昕二巻本の存在を考えるべきであろうと思われる。即ち契嵩の壇経が三巻本であつたということは、上下二巻本の恵昕本の外に、六祖の詳細な伝記である曹渓大師伝が加わつて三巻とせられたと見るべきである。この想定を裏づける資料として、高麗の知訥が、泰知七年（一二〇七）に『法宝記壇経』の跋文を書き、その中で壇経の一節を引用して自説を証明する箇所があるが、その一節は敦煌本には無く、恵昕本に存在するものであつて、徳異本・宗宝本の内容となつているものであり、この事実は、宗宝本が契嵩本に由来する事実を裏付けるのであるが、同時に契嵩の編纂した三巻本が本づいたものは、明らかに恵昕本であつて敦煌本では無いことが証明せられるのである。かくして宗宝が見た三本は、恵昕本と契嵩が校訂勒成した三巻本と徳異本との三本であることが確認せられる。宗宝は、内容及び各章題名等を、主として契嵩本に従つて編纂したことが、之に先立つ徳異本とその内容各章題名に相異のあることによつて推定せられるのである。

徳異本は、その序によると、徳異が幼年古本を見、三十余載遍く求めていたが、近ごろ通上人が全文を尋到したものを得て、呉中の休休禅庵、即ち江蘇省蘇州の休休庵で刊行したといい、徳異は全文をそのまま刊行したことが知られる。徳異本の源流は壇経の刊行史を辿ることによつて、次の様に見ることが出来る。

康熙四十二年（一七〇三）刊行の徳異本に、曹渓の後学の中華子太憲が記して、「右は成化十五年（一四七九）白雲屏風庵開板本を重刊した」旨を述べ、この成化十五年本は、元の延祐三年（一三一六）本に本づくものであることが後記によつて知られ、延祐三年本は更に後記によると、泰和七年（一二〇七）本、即ち海東曹渓山修禅社の沙門知訥跋の刊本に本づくものである。右の泰和七年本に本づき、南宋の宝祐四年（一二五六）に道人霊淑が印施し、晦堂安其がその跋文を書いた壇経があり、それに本づいて明の万暦二年（一五七四）に曹渓後学知幻堂無住子行思が重彫している。これによつて見ると、一二〇七年に、沙門知訥跋の修禅社道人湛黙が刊行した壇経を、更に南宋の宝祐四年に霊淑が印施して流通した壇経

があつて、徳異が三十余年に亘つて尋求して遂に之を通上人より得て刊行したのが徳異本であることが知られる。然し徳異本は既に古本に比べてその内容が増広せられたものである。宗宝本が必ず徳異の序を掲げていることも、宗宝本が徳異本をも参考にしていることを明瞭にするものである。従つて宗宝本が先に考えたように、契嵩本によることが明らかであるように、徳異本の基となつた知訥跋の壇経も、契嵩が恵昕本と曹渓大師伝とに本づいて編纂した三巻本に拠るものであることが推察せられる。宗宝本と徳異本の両者のうち徳異本は恵昕本に傾くことが大きいと思われるが、その理由は、徳異本と恵昕本の各章の題名を比較することによつて確かめられる。更に文中の所々に、恵昕本の内容を斟酌し、これと句調を同じくしているものが見られる点は、宗宝本より徳異本がより恵昕本に近い性格を有するものと見る証左となし得る。

最後に、宇井伯寿先生の『壇経考』の宗宝本の考察に附して言及せられている支那本の源流について考えるに、『壇経考』中には、民国十八年（一九二九）金陵刻経処刊行の『六祖大師法宝壇経』並びに北平中央刻経院仏経善書局刊行の『六祖大師法宝壇経』の考察がある。それによると「この中、民国十八年本には、序文等全く無く、直に本文があり、六祖大師事略として宗宝本にある縁起外紀を挙げて居る。後者は、巻首に目録と校勘記とを掲げ、序として、宋吏部侍郎郎簡述の「六祖大師法宝壇経記序」を出している。（中略）又、両本は共に宗宝本と同じく、本文も、十品の品名が宗宝本と同一であり、唯各品の題名に凡て品字を入れていることのみは、宗宝本と異る。又各品の文も、宗宝本と一致する点が比較的に多い。然し重要な点では多少一致しない。最も著しい相異は、宗宝本では、荷沢神会の六祖に参ずる記事の一節が、頓漸第八に存するのに、支那本では全く同一文が、機縁品第七に存することである。云云」と述べておられる。宇井先生の紹介せられた支那本の後者のものは、その刊年が不明であるが、同一系統のものに巻頭に明の万暦四十一年（一六一三）曹渓修行観察の祝以豳の序を有する『六祖大師法宝壇経』があり、これによると、次に憲宗の御製序を附し、更に郎簡至和三年（一〇五六）の序が附せられている。この祝以豳の序は、右の壇経を憨山徳清（一五四六―一六二三）が勘校出版する時書いたものと思われるが、その本文の初に掲げる重刻法宝壇経凡例の中に、「得法の弟子なる志誠・志徹・神会は、皆付属の列に在る。以前に編せられた壇経は、此の三人を頓漸品中に掲げているが、それは不都合である。是の三師は、大いに曹渓に功有る人故、特に表して之を出す」と、その理由を説明している。これによつて支那本が宗宝本と相違するのは徳清の考えによることが知られる。宇井先生は更に注意をう

ながして、「右の支那本は、宗宝本の系統のものであるが、徳異本から巻尾の〈又紀〉と〈宗太祖以下の崇奉記事〉を取つている」と指摘しておられるが、その理由については触れておられない。恐らくこれは、徳清が宗宝本を校勘するに当つて、明の嘉靖十四年（一五三五）刊行の徳異本、即ち、広東韶州府曹渓宝林山勅賜南華禅寺沙門泰倉の跋文のある徳異本を参考にしたものであることが、跋文の記事、即ち、「後志の者徳異其の文を全うし、鏤板流通す、又曹渓の道進重ねて刻板流伝す、其板歳久しく湮没す云々」の語によつて察知せられる。即ち憨山大師徳清が曹渓に住した時に得た徳異本を参照して、宗宝本に本づき乍ら、所謂支那本と称せられる一系統のテキストを作成したことが知られる。

以上要するに、宗宝本も徳異本も亦支那本も、すべて恵昕本に本づいて曹渓大師伝を参酌して編纂せられた契嵩三巻本に深い関係を持つものであつて、そのうち特に徳異本は恵昕本を尊重していることは、先に述べた通りである。

壇経成立の動機は、六祖の晩年にその会下に来たと伝えられる神会が、六祖恵能の禅の根本精神に触発されて、禅の本来のあり方に気付くや、直ちにその大綱を記録して、壇経と名附け、これを六祖恵能に質ね、更に恰かも同時期に六祖の会下に在つた慧忠にも示し、看心の禅風と異なる南宗禅の特色を共に讃嘆尊重し合うという事実のあつたことが想定される。慧忠国師は後に、その内容が変改され、六祖の聖意が失われたとして壇経の改訂を嘆ずるという一場面があるが、それは国師が変改以前の壇経を見ていたことを物語る。現在の敦煌本壇経も第一次の変改を経たものと思われるが、その後敦煌本壇経の如き原始壇経が、伝授本として伝授せられる時、そこには単なる書写ではなく、六祖の禅法を寸毫も害うことなく、壇経全文を如何に整備完全なものとするかという課題が、代代の嗣法の弟子の伝授書写の基本精神とせられ、その結果完成したものが恵昕本であつたのではないかと考えられる。他方『曹渓大師伝』が流布せられるようになると、両者が折衷せられ、且つその後の歴史的展開をも祖堂集・景徳伝燈録等の資料により合糅して、新しい壇経が出現することとなり、壇経の増広が一面禅思想史展開を反映することともなつた。そこに宗宝本の一つの意義があると思われるが、原始壇経を知る為には敦煌本が最も重要なものであり、又その誤りを訂正する為には、恵昕本が是非参照せられねばならない。又契嵩以後に出現する徳異本、宗宝本、支那本等も、すべてその重要な根源は恵昕本から出発していることを考える時、恵昕本は六祖壇経研究の中核を為すものであるということも出来ると信ずるのである。

1「然細詳本文、亦有身生滅、心不生滅之義、如云真如性自起念、非眼耳鼻舌能念等、正是国師所訶之義、」。